

国

語

注
意

- 1、問題は【一】から【三】まであります。
- 2、試験時間は50分です。
- 3、解答は解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
- 4、字数制限のある問題では、句読点やかっこ、その他の記号も一字に数えます。
- 5、答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。

受験 番号		氏名	
----------	--	----	--

【一】 次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑮の各文の傍線部のカタカナを漢字で書き、傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- | | | |
|----------------------------|----------------------------|-------------------------|
| ① 自転車を <u>シュウリ</u> する。 | ② <u>ハンシヤ</u> 神経が良い。 | ③ 犯人の <u>ユクエ</u> を追う。 |
| ④ 雨で試合は <u>ジュンエン</u> となった。 | ⑤ 震災後、鉄道が <u>フツキユウ</u> した。 | ⑥ 世界的に <u>チヨメイ</u> な作家。 |
| ⑦ 花の香りが <u>タダヨウ</u> 。 | ⑧ <u>スルドイ</u> 刃物。 | ⑨ <u>シオ</u> の香りに満ちた港町。 |
| ⑩ 冷淡な態度。 | ⑪ 恋人の顔が <u>脳裏</u> に浮かんだ。 | ⑫ 世界平和を <u>祈念</u> する。 |
| ⑬ <u>志</u> を高く持とう。 | ⑭ <u>真に迫る</u> 演技だった。 | ⑮ 天下統一の野望を <u>抱く</u> 。 |

問二 次の①～③のア～エの各文の傍線部の語で、他と文法的な性質が異なるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|-------------------|
| ① ア 会話がうまくかみ合わないな。 | イ 父はめったに怒ることはなかった。 | エ 練習をしなれば強くなれないよ。 |
| ウ 誰もいない家に帰る。 | エ 練習をしなれば強くなれないよ。 | |
| ② ア 山奥で鹿が鳴き、声が響き渡った。 | イ 父は山で <u>遭難</u> したが、無事に生きて帰ってきた。 | |
| ウ この <u>続き</u> はまたの機会にしよう。 | エ 世を <u>嘆き</u> つつも、希望は捨てない。 | |
| ③ ア 最近の夏の暑さは異常だ。 | イ あの投手のコントロールは正確だ。 | |
| ウ この問題を解くことは簡単だ。 | エ 彼も私にとってはかけがえない仲間だ。 | |

問三 次の①～③の各文の傍線部の三字熟語の（ ）に入る適切な漢字一字を書きなさい。

- | |
|--|
| ① 花火・スイカ・風鈴といえば、夏の風物（ ）だ。 |
| ② 試合は接戦だったが、（ ）一重の差で、王者が挑戦者を退けた。 |
| ③ 今までの人生の思い出が、走（ ）灯のように、一瞬、頭の中を駆けめぐった。 |

問四 次の①～③の内容と最も関係の深い言葉として適切なものを、後の選択肢ア～キからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

- | |
|--|
| ① 美人で評判の南さんが、言い寄ってくる男性には胸がときめかず、「運命の人はどこにいるのだろう……」と寂しい毎日を過ごしていたが、ある日、隣の家の、ただの幼なじみだったはずの達也さんが魅力的な男性であることに気づいた。 |
| ② 亡くなった父は口やかましい人だった。「男子たる者、女子どもをいじめな」
「人の欠点のあらさがしばかりするな」
「他者をおとしめて喜ぶような人間になるな」……大切な教訓ばかりだったのに、あの頃はただうるさく思うだけだった。 |
| ③ クラス会で、笑いをとろうと思ってみんなの前で暴れん坊の剛田君のもののまねをやってしまった……、剛田君本人もその場にいたのに。剛田君は馬鹿にされたと怒っているらしい。あー、なんであんなことをやってしまったんだろう……。 |

- | | | | |
|-----------|---------------|-----------|---------|
| ア 良薬は口に苦し | イ 焼けぼっくりに火がつく | ウ 泣きつ面に蜂 | エ 釈迦に説法 |
| オ 魚心あれば水心 | カ 灯台もと暗し | キ 覆水盆に還らず | |

【二】 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。なお、設問の都合上、問題文は省略されているところがある。

「知ってるつもり!？」というタイトルのテレビ番組がありました。この表現を見た時に、^①私は、いまの世の中で「知性」と呼ばれているものは、すべてこれ、すなわち「つもり」「そんな気がしているだけ」ではないかと思っています。

「情報化社会」という言葉が頻繁に使われるようになったのは一九七〇年代ごろだったと思いますが、いま現実に存在している「情報化社会」は、当時言われていた「情報化社会」と同じものとは思えないほど極限まで進んでしまっています。^A

日常生活においても、情報が洪水のようにあふれていますし、聞いたことがない事柄に出会っても、ネットでちよつと検索すれば、瞬時にしていただきたいことはわかってしまいます。ですから、日常的にそうした状況にいるわれわれは、「もう、すべてを知ってしまった」「知らないことは何もない」と、過大な情報量にげつぷが出そうな気分になっているのです。^B

それと関係するのでしょうか、最近の人は「知ってる」「知らない」ということに妙に敏感になっているようです。「××知ってる?」と聞かれたとき、「知らない」と答えるのを過度に恥と考えます。じつさい、「知らない」と答えると、「えっ、そんなことも知らないの?」などと言われてしまいます。これは、情報の引き出しをよりたくさん持っていることを知性とはき違えていることのあらわれではないでしょうか。^② ××を知らないから何だと言いたくなるのは、私だけではないはずだ。

^I、「何でも知っている博学な人」はすばらしいと思います。けれども、私は本来的には、「物知り」「情報通」であることと、「知性」とは別物だと思います。

たとえば、パソコンの操作が得意な小学生が、機械の苦手なお父さんに代わって旅行のプランを作ってあげる、としましょう。即座に交通手段と宿と目的地の情報を集めて、プリントアウトする。だからと言って、この小学生がお父さんより知的な人間とは言えないでしょう。^C

情報を扱う技術に長けている——そうした知のあり方と関係するのでしょうか、^③私は情報技術に通じた若い人たちの中に、変に老けこんだイメージの人がいるように思えてなりません。^{*1} 虚心に好奇心を持たないというか、^{II}、最初から先行

きを予想してやめてしまっていると言いましようか。それもまた、ものごとの原因と結果のいくつかのパターン（こうすれば、こうなる）を、「情報」として蓄えてしまっているゆえではないかという気がします。

情報の引き出しでも、みずからの血肉になっているような情報が入っている引き出しならよいのですが、服のポケットにたくさん紙片を詰め込んでいるような知性——。これを、「知ってるつもり」なだけの知性と言ったら厳しすぎるでしょうか。

人間の知性というのは、本来、学識、教養といった要素に加えて、協調性や道徳観といった要素を併せ持った総合的なものを指すのでしよう。^{III}、本来そうあるべきだった人間の知性は、どんどん分割されていきました。それは科学技術の発達と

密接に関係しています。分割されて、ある部分ばかりが肥大していった結果、現在のようになってしまったのです。^D

『職業としての学問（科学）』の中で、^{*2} ウェーバーはこう言っています。

われわれはみな、自分たちは未開の社会よりはるかに進歩していて、アメリカの先住民などよりはるかに自分の生活についてよく知っていると思っている。しかし、それは間違いである。われわれはみな電車の乗り方を知っていて、何の疑問も持たずにそれに乗って目的地に行くけれども、車両がどのようなメカニズムで動いているのか知っている人などほとんどいない。しかし、未開の社会の人間は、自分たちが使っている道具について、われわれよりはるかに^{*3} 知悉している。したがって、^{*4} 合理化は、われわれが生きるうえで自分の生活についての知識をふやしてくれているわけではないのだ——と。

そして、高度に科学が進んだ医学についても、こう言っています。

《医者は手段をつくして患者の病気を治し、生命を維持することのみに努力を傾ける。たとえその患者が苦痛からの解放を望んでいても、患者の家族もそれを望んでいても、患者が治療代を払えない貧しい人であっても関係ない。すなわち、科学はその行為の究極的、本来的な意味について何も答ええない——と。》

ウェーバーは、十九世紀ロシアの文豪、トルストイに非常に注目していて、トルストイにたびたび言及しています。

そのトルストイの『人生論』の中にこんなエピソードが紹介されています。

あるところに水車小屋で粉ひきをしている男がいました。彼は自然の恵みの中で朝から晩まで一生懸命働いていたのですが、あ

るとき水車のメカニズムに興味を持ちます。そして、水車が引きこまれてきた川の水によって動いていると理解すると、今度は川の研究に熱中してしまい、気がついてみれば、本来の仕事である粉をひくことを忘れてしまっていた——というものです。

トルストイの^{*5}「テーゼは徹底的に『反科学』です。科学はわれわれが何をなすべきかということについて何も教えてくれないし、教えてくれないばかりか、人間の行為がもともと持っていた大切な意味をどんどん奪っていくと考えました。

(姜尚中『悩む力』)

注 *1 虚心……あるがままの素直な心。

*2 ウェーバー……ドイツの社会学者・経済学者。

*3 知悉……細かい点まで知りつくしていること。

*4 合理化……むだを省き、能率を良くすること。

*5 テーゼ……目標としての根本的な方針。

問一 問題文中の I Ⅲ に入る言葉として最も適切なものを次の選択肢ア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

ア あたかも イ あるいは ウ しかし エ だから オ もちろん

問二 問題文中の傍線部①「私は、いまの世の中で『知性』と呼ばれているものは、すべてこれ、すなわち『つもり』『そんな気がしているだけ』ではないかと思えます」とあるが、ここという『知性』と呼ばれているもの」について筆者が比喩的に述べている箇所を問題文中から二十七字で抜き出し、最初と最後の四字をそれぞれ答えなさい。

問三 問題文中には次の一文が抜けている。この一文が入る最も適切な箇所を問題文中の A D から一つ選び、記号で答えなさい。

それと同じようなことだと思のです。

問四 問題文中の傍線部②「××を知らないから何だと言いたくなるのは、私だけではないはずだ」とあるが、最近の人と筆者は、「知性のある人」とはそれぞれどのような人であると考えているか。問題文の内容を踏まえ、とらえ方の違いが明らかになるように、わかりやすく説明しなさい。

問五 問題文中の傍線部③「私は情報技術に通じた若い人たちの中に、変に老けこんだイメージの人がいるように思えてなりません」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものを次の選択肢ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 情報をうまく扱うことで手間を省くことばかり考え、自力で物を作り出そうとする意志を持たなくなっているから。
イ 情報を扱う技術に長けていることで十分に満足し、人との関わり合いなどの面倒なことを避けようとしているから。
ウ 情報をうまく扱えることで全てを理解したような気になり、物事の本質を探索しようとする気持ち失われているから。
エ 情報を扱う技術を向上させることにこだわるあまり、物事に対し臨機応変に対応することができなくなっているから。

問六 問題文中の《 》において、ウェーバーはどのようなことを伝えようとしているか。次の選択肢ア～エから最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の人生については自分の意志で決めることが人にとって大切なのに、高度な医学はそれを無視し、病気について解明し、克服することを目的としていること。

イ 病を受け入れ、心穏やかに死を迎えることが人にとって大切なのに、高度な医学はそれとは逆に、患者に病気に立ち向かう強い精神力をもたせようとする事。
ウ 苦しみや痛みを感じることなく過ごすことが人にとって大切なのに、高度な医学はそれに対し、痛みのない治療を施すほどのレベルに達していないこと。
エ 個々の経済的な事情に応じた治療を受けることが人にとって大切なのに、高度な医学はそれにも関わらず、貧しい人にも高額な費用のかかる治療を強制すること。

問七 次の選択肢ア～エから、問題文の内容に合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代の社会の情報化傾向は、その言葉が生まれてから時を経てさらに勢いを増し、当初から多くの人々に予測されていた通りの状況になっている。
イ 文明の後れた社会の人々に比べ、現代人の生活は科学技術が発展し、合理化され便利になっているが、生活に関する知識の面において優れているとは言えない。
ウ 人間の知性は、もともとはいろいろな要素をあわせたものとして位置づけられていたが、近年においてそれは人間性に関わる分野と感覚的な分野にわかれていった。
エ トルストイの『人生論』の粉ひきの男は、身の回りの物に興味を持ち、その原理を探究することで生活に関する知識を身につけた例として述べられている。

【三】 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。なお、設問の都合上、問題文は省略されているところがある。

これは、自転車で世界一周の旅に出た筆者の回想録である。世界中で多くの人に出会い、七年半続いた筆者の旅ももう終わろうとしていた。ヨーロッパから中国まで走り抜け、日本まであともう少しとなった段階で、筆者は旅の最後に*₁シルクロードを走りたいと思い、飛行機でウルムチという街まで戻ることにした。

I

*₂ ウイグル自治区の区都ウルムチへの飛行機代は二十元、日本円にして約三万円だ。これはいつも食べているワンタンメン千杯分の値段で、いまのぼくにはAの飛び出るような高さである。ついでにもうひとついえば、シルクロードは酷暑期で、日中の気温が五十度近くにまで達する。

高い金を払って、距離を二倍以上にのぼし、灼熱地獄に飛び込む。そんなバカバカしい話もない。

「もうこれだけ走ってきたんやから、ええやないか……」
ぼくの怠け根性がそうささやかしてくる。

しかし、そもそも、快適で楽しいだけの旅行をしたいのなら、最初から自転車なんかで行かなければいいのだ。^① 大きな手ごたえをつかみかかったから、この旅を始めたんじゃないのか？

ぼくはあれこれ考えるのをやめた。ワンタンメン千杯分のチケットを「えいやつ」と購入したのである。

② ウルムチ空港に降りると、砂漠気候の乾いた空気が肌をなでた。これまでいた東南アジアや中国南部のジメジメした空気とはまるで違う。

ウルムチを出ると、すぐに未舗装の悪路になり、それが三日間続いた。このとき砂ぼこりを吸い続けたせいで、心配していたとおりの事態が起こった。気管支炎の再発である。

「まったく、思ったとおりやないか。ゴホッゴホッ。だからやめとこうつて……ゴホッゴホッゴホッゴホッ！」
咳は止まらないわタンはからむわ散々である。体力が無駄に奪われ、体がどんどん重くなっていく。

II

そんなある日のことだ。

灼熱の砂漠の上を風のような向かい風が吹き荒れ、自転車は歩くより遅いスピードしか出なかった。次の村までは一四〇キロ。その距離を考えて、水を十リットル積んだのだが、向かい風は計算に入れていなかった。距離がのびないうえに熱風で喉がひりつくため、どれだけ水を飲んでも飲んだそばから渴きに襲われる。ボトルの水が恐ろしい速さで減っていく。

——次の村まで水が持たないんじゃないか？

朦朧とした頭で、そう思った。最悪の場合、車に助けてもらえばいいが、それだけはなんとしても避けたい。

前から一台の軽トラがやってきて、陽気にクラクションを鳴らしながら通り過ぎていく。ぼくはそれに手を振って応える余裕もなく、下を向いたまま自転車をふらふらとこぎ続けた。しばらくして、うしろからエンジン音が聞こえてきたかと思うと、一台の車がぼくを抜かしていった。よく見るとさっきの軽トラだ。Ｕターンして戻ってきたらしい。

軽トラは前方でとまり、なかから四人の男女が降りてきた。どうやら家族のようだ。彼らの前で自転車をとめると、おじさんがニツコリ笑ってぼくにコーラを渡してきた。

「ハイ・シー・ビンダ」

その温かい目を見た瞬間、体じゅうの力が抜け、その場に崩れそうになった。ぼくはそれをこらえ、ありったけの気持ちをこめて、「謝謝」と言おうとした。だが、かすれたような音が呼吸音にまじるだけで、まったく声にならないのだ。長時間、熱風を

浴び続け、いつの間にか声帯がつぶれていたらしい。おじさんは再び微笑み、娘さんに、「水もあつただろ」と言つて車に取りにいかせた。彼女もまた、持ってきたミネラルウォーターのボトルをぼくに差し出しながら、やさしい目をして笑った。ぼくは「謝謝」と言う代わりに、みんなに握手してまわった。

彼らが去ってから、まだかすかに冷たいミネラルウォーターを一気に飲んだ。光がキラキラと体のなかに広がっていくようだった。水ってこんなに甘いものだったのか……

急に手足がガクガク震え始めた。力が抜け、地べたに崩れ落ちるように座り込んだ。ぼくは震えの止まらない両ひざを抱え、そのなかに顔をうずめた。なんだか猛烈に泣きたいような気持ちだった。

これまで、いったいどれだけのやさしさを受けてきたのだろう……

くたびれきつた頭のなかを、さまざまなシーンがよぎっていった。

みんな、なぜそこまで他人にやさしくできるのだろうか。通りすがりの旅行者など、放っておくことだってできたのだ。それなのに立ち止まって、手をさしのべてくれた。

そして、ぼくはそれを何度も受け取ってきた。さしのべられた手に、自らの手をのばして、彼らの善意を受け取ってきた。

③ そのことに、なぜ、こんなにやりきれなさが募ってくるのだろうか。

人の親切を受け取るだけ受け取つて、ここまでやってきた。最後の最後まで人の厚意にあまえっぱなしだった。そして、いい旅だったと勝手なことを思っている。

いま、自分がここにいることを当たり前に思つてはいけなない。すべての偶然と、僥倖と、数々の大きな心に支えられて、自分分はここにいるということを肝に銘じておかなければならない。そして、そのことをいつも顧みなければならぬ。

これまで与えられてきた慈しみを、瞳の色を、いつも心に留め、あるいはこれから自分がささくれたつような瞬間があれば、それらを振り返つて立ち止まり、そしてこれから自分も返していくのだ……

III

その日は夕暮れどきに見つけた廃鉱はいこうのそばにキャンプすることにした。テントを張るのも*4億劫おっくうなほど、*5疲弊ひへいしきっており、体力が回復するまで砂の上に横になっていた。

砂漠に沈む夕日が赤々と燃え、大地や廃屋はいおくを染め上げた。光が失われていく様子を見ながら、ぼくはそのまま寝転がっていた。背後の丘から何かの足音が聞こえた。そつちを見ると、思わず目をむいた。鹿である。大きな体と角が*6シルエットになって、暗がりのなかにぼんやりと浮かんでいる。ぼくは半身を起こした。

鹿はぼくに気づいた。ぼくたちはじっと見つめ合った。ぼくが静かに腰を浮かすと、鹿は突然*7きびすを返して軽快に二、三度飛び跳ね、丘の向こうに消えた。

夢でも見ていたのだろうか、と思った。まったく人を寄せつけない、不Bの砂漠である。そんなところに鹿がいるなんて……。

ぼくは再び大地の上に横になり、ちらほら出てきた星をしばらく眺めていた。④ひどく満ち足りたような気分だった。

(石田ゆうすけ『行かずに死ねるか！ 世界9万5000km自転車ひとり旅』)

注 *1 シルクロード……中央アジアを横断する古代の東西交通路。 *2 ウイグル自治区……中国西北部に位置する自治区。

*3 僥倖……予想もなかった幸運。

*4 億劫……気が進まず、面倒な様子。

*5 疲弊……心身が疲れ弱ること。

*6 シルエット……影絵のような映像。

*7 きびすを返して……引き返して。

問一 問題文中の A B に入る最も適切な漢字一字を、それぞれ次の選択肢ア～キから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 心 イ 顔 ウ 目 エ 耳 オ 胸 カ 毛 キ 足

問二 問題文中の傍線部 a 「肝に銘じて」 b 「ささくれだつ」の意味として最も適切なものをそれぞれ選択肢ア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 肝に銘じて

ア よく味わい感動して

イ 自分だけの胸の内に秘めて

ウ 考えて正しく理解して

エ 忘れないように心に刻んで

b ささくれだつ

ア わけもなく寂しさがこみ上げる

イ ささいなことにも心が傷つく

ウ 気持ち荒れてとげとげしくなる

エ 他人に対し激しい恨みを持つ

問三 問題文中の傍線部①について、この旅によって得られる「大きな手ごたえ」とはどういうものか。自分の言葉で二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問四 問題文中の傍線部②「ウルムチ空港に降りると、砂漠気候の乾いた空気が肌をなでた」の箇所を用いられている表現技法と同じものが用いられている一文を問題文のⅠの部分から探し、最初の四字を抜き出して答えなさい。

問五 問題文のⅡの部分から、筆者が最後まで自転車での旅を続けることにこだわっている様子が読み取れる一文を探し、最初の四字を抜き出して答えなさい。

問六 問題文中の傍線部③「そのことに、なぜ、こんなにやりきれなさが募ってくるのだろうか」とあるが、筆者が「やりきれなさ」を感じている理由として最も適切なものを次の選択肢ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自転車世界一周するという目標をかける一方、心のどこかで他人の親切をあてにしながら旅を続けてきた自分のずるさに対してやるせなく思っているから。

イ 旅の中で多くの人々に親切にされ、いつしかそれを当然のように思い、感謝の気持ちも失ったまま旅を楽しんでいた自分のよう慢さに気づき、恥じているから。

ウ 自分の力を試すと決意して挑んだ旅なのに、結局は多くの人の優しさに支えられなければここまでたどり着けなかったことに気づき、敗北感を感じているから。

エ 何の見返りも求めることもなく親切にしてくれる人々に対し、何も返すことなく、ただ自身の満足のためだけに旅を続けてきた自分を情けなく思っているから。

問七 問題文中の傍線部④「ひどく満ち足りたような気分だった」とあるが、筆者がこのような心情になった理由について説明しているものとして最も適切なものを次の選択肢ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孤独に打ちのめされていた旅の中で思いがけず鹿に出会い、束の間とはいえ寂しさから解放されているから。

イ 草木さえ生えない砂漠だが、そんな中でも、たくましく息づいている確かな生命の存在を実感しているから。

ウ 砂漠という厳しい環境の中で鹿と出会い見つめ合うことで、互いに苦勞を分かち合い、心が通じ合ったから。

エ 苦しみつづ旅を続けていたが、鹿によって劣悪な環境の中を生きぬくヒントを与えられたと思っているから。

問八 筆者はこの旅の経験を生かし、今後どのように人と関わっていこうと考えているか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

国語

解答用紙

(2015 J1)

受験番号
氏名
得点

【一】
【二】

問一	問二	問四
①	①	①
②	②	②
③	③	③
④	④	④
⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩
⑪	⑪	⑪
⑫	⑫	⑫
⑬	⑬	⑬
⑭	⑭	⑭
⑮	⑮	⑮

【三】
【四】

問一	問四	問五
I		
II		
III		
問二		
問三		
問六		
問七		

【五】
【六】

問一	問三	問四	問八
A			
B			
問二			
a			
b			
問六			
問七			